

大学間競争は 誰のため？



人に喜ばれることをやりがいに感じる。

② 社会貢献に繋がる商品(例えば、二酸化炭素の排出量を従来より抑えたものなど)を開発したいと思う。

③ 新商品を開発して売り上げを伸ばさないと、会社が潰れてしまう。

「学生の集まる大学(学部等)を作る」
動機付けとして、

① 学生がキャンパスで充実した研究やサークル活動を行い、学生から喜ばれることをやりがいに感じる。

② 卒業後、大学で学んだことを社会に還元できる学生を育成したいと思う。

③ 新学部設置や改組を行って学生を集めないと、大学が潰れてしまう。

ここ数年の大学改革の理由として、少子化による学生数減少の中、いかにして学生を集められるかが挙げられてきたと

私が現在勤めている大学で働くようになって8年が経ちました。8年前もそうでしたが、「大学間の生き残り競争が激化し、大学はあらゆる改革を迫られている。今後は戦略的な施策が必要になる。」といったようなことがあちこちでいわれていると思います。普通の会社でも、売れる商品を販売していかなければ、その会社は潰れてしまいますし、そういったことでは同じことなのかなと思います。

ものすごく単純に考えて、大学が潰れ

ないようにするためには、学生を集めることができればいいわけですが、どうしたら学生を集められるかが問題になってくると思います。唐突ではありますが、「売れる商品を作る」ことと「学生の集まる大学(学部等)を作る」ことについて、全く学術的ではなく、個人的な考え方として、比較してみます。

「売れる商品を作る」動機付けとして、

① 自分の開発した商品がたくさん

思います。この理由だけみれば、③の理由が第一で、そのために①・②が付されるというふうには思えてきます。それでも、①・②がセットになっていればいいのですが、それすら危ういと思う事例として、改組を頻繁に行っている大学が挙げられます。

改組の繰り返し

近年学部名や学科名を変更して、受験生を獲得しようとする大学が増えている気がします。また、せっかく名称を変えればかりなのに、再度名称変更する学部も見受けられます。私の知っている中では、学部を新設しても思ったほど学生を集められなく、3年で改組をしてしまった大学があります。つまり、学部開設年度に入学した学生が卒業しないうちにその学部の募集を停止してしまったことということになりました。

学生募集をする側からは、社会のニ-

ズに適った学部を受験生に提供することが大学の役割であり、受験生にも受入れられるとの理由が述べられることでしよう。しかし、教える側、つまり教員が大幅に変わるわけでもなく、もちろん教員の専門分野が変わるわけでもありません。

自動車モデルチェンジをする際には、当然エンジンの質がよくなったり、快適性が増したりするものです。一方、大学の改組の際にはカリキュラムが変わるわけですが、実際に教える人間が入れ替わったり、その教員の質が劇的に向上しているわけではありません。

改組するということは、当然新しい組織のほうがいいから改組するわけです。ある大学の理事から、「学部改組の議論を長々している時間的余裕はない。まずは改組して、不都合なところがあれば逐次見直していけばいい。」との発言を聞いたことがあります。しかしこの発言は、欠陥商品を定価で販売しているようなも

のと私は感じました。それであればおとし価格を設定する必要があるのではないかと思います。もし普通の「商品」で考えた場合、一度購入した顧客が再度同じ商品も購入することもあります。受験生が大学を選ぶ場合、一旦大学を選んだ後にもう一度大学に入り直すことは殆どないといえます。そこが「売れる商品を作る」と「学生の集まる大学学部等」を作る」とこととの大きな違いだと思います。

もし欠陥商品とわかった場合、それを購入した顧客はその会社が出す新製品は二度と購入しないと思えますが、大学の場合、入学した翌年に改組されても、その学部を辞める訳にはいきません。

「学生のニーズ」「大学改革」の名の下に様々な取組みがなされている大学はたくさんありますが、それらの大学は、社会的責任を果たしたいという使命から行動を促されているのか、それとも大学が生き残るため、もっと直接的な表現を

すれば自らの職を失わないようにするためから行動を促されているのか、どちらなのでしょう？

もちろん、一労働者として、または妻子を扶養している我が身のこととして考えると、所属する組織が潰れて（もしくは組織から解雇されて）、失業することは絶対に避けたいところです。しかし、たとえ生活のために仕事をしているとしても、その仕事が社会の役に立っている（大学でいえば、社会に貢献できる学生を輩出することや研究成果を出すことでしょうか）ことを誇りに思っている仕事をしていかなないと、労働者にとっても、そこで学ぶ学生や社会にとっても不幸だと思っています。

大学間「協奏」の時代へ

これまで大学間競争を煽ってきたと思われる文部科学省が、平成二十年度から「戦略的大学連携支援事業」ということ

を始めました。その目的は、「国公私立

大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化、大学運営基盤の強化等を図ること」とされています。平成二十一年度予算では、平成二十年度の倍額である六十億円の予算がつけました。このプログラムによって、これまでの競争ありきの考え方が変わってくるとは思いますが、ライバル校に勝つことや偏差値を上げることに奔走している大学の考え方が少しでも変わってくればと思います。大都市にある大学もあれば、地方都市にある大学もあり、また学部構成も様々な大学が各地にあるわけですが、各々担う役割があるはずで、大学間で蹴落とし合いをする労力を、協力し合える大学と共に考え、各大学の役割を果たすための力に向けられれば、知の拠点として輝く大学が全国に広がるのではないでしょう

か。

愛知大学企画・広報課

島尾 淳

